

埼玉県飯能周辺における日帰り観光地の展開と特徴

— 旅行ガイドの記載を中心として —

山下 琢 巳

I はじめに

人々の観光行動を決定づけるものとして、旅行ガイドブックが果たしてきた役割は大きい。現在では書籍と並び電子媒体によっても容易に情報を得ることが可能となったが、システムが変わっても旅行ガイドや順路を案内するサービスの需要は大きく発展しているといえる。

人が余暇を楽しむ際、何に価値を求め時間と費用をかけるのかというのは、時代によって大きく変化してきた⁽¹⁾。筆者らはこれまでに埼玉県川越市街の観光地化に関して、「小江戸」というイメージを通して、「蔵造り建築群」という歴史的景観の再構築が行われ、観光資源となったといった過程を明らかにしてきた⁽²⁾。これら蔵造り建築の多くは、明治26年(1893)の川越大火以降に完成し、昭和50年代までは地域住民の日常品を販売する商店街であったものが、歴史的建築物群という評価を経て一大観光地となった経緯を有する。そして、この際に「小江戸」というキーワードが生まれたが、それが人々に認知されるには、紹介する情報媒体が大きな役割を果たしたことは間違いない⁽³⁾。

一方で、川越の観光地化には東京都心との交通の利便性も大きく寄与している。川越市街の鉄道路線に注目すると、現在は西武新宿線の本川越駅、東武東上線の川越駅・川越市駅、JR川越線の川越駅と複数の路線、駅があり、川越駅はターミナルとして機能している。このうち、最も早く開業したのは明治28年(1895)、本川越から所沢を経て国分寺に至る川越鉄道⁽⁴⁾であり、9年後の明治39年(1906)には川越電気鉄道が川越久保町と大宮の間を結んだ。このように当初の鉄道路線は、東京都心と川越を直通せず、国分寺もしくは大宮での乗り換えを必要とした。その後東武東上線が大正3年(1914)に池袋・田面沢駅⁽⁵⁾で開業し、これによりようやく川越と東京中心部との直通が可能となる。一方、川越鉄道から改称した西武鉄道も昭和2年(1927)に高田馬場・東村山間を開業させ、国分寺を経由せずに都心方面と直通できるようになった。

ところで、埼玉県には東京都心と郊外を結び、後に同じ西武鉄道に組み込まれることになる鉄道路線がもう1路線存在する。それが、当初は武蔵野鉄道として大正4年(1915)に池袋・飯能間で開業した現在の西武池袋線である。しかも飯能には、鉄道開通以前の明治32年(1899)に

入間川⁽⁶⁾までの馬車鉄道が存在していた。

このように、鉄道路線の開業によって都心からの日帰り圏となり都心の旺盛な行楽需要に呼応し、新たな「日帰り観光地」として見いだされていく地域が東京近郊には多く存在し、武蔵野鉄道はその需要によって旅客数を伸ばしたという特徴を有する⁽⁷⁾。そしてその際には鉄道会社の宣伝や、当時の旅行ガイド本、あるいは紀行文を得意とする作家による訪問記、滞在記の存在がそれら観光需要の掘り起こしに寄与したことが知られている⁽⁸⁾。そこで本稿では、埼玉県飯能市とその周辺を事例に、明治時代以降に出版された紀行文・旅行ガイド本と、第二次大戦後に出版された行楽地を紹介する雑誌から、飯能周辺がいかに取り上げられ、観光地としてのイメージ形成を行ってきたのかを明らかにすることを目的とする。

ところで行楽地を紹介する出版物は、江戸時代にはすでに「名所図会」や「道中記」、あるいは浮世絵の風景画が存在し、江戸に暮らす庶民に人気があったのみならず実際に出かける際の指南書ともなっていた⁽⁹⁾。これらは神社仏閣や景勝地、あるいは季節に応じた花鳥風月の名所からなり、いずれも非日常を体験する場として機能していたが、徒歩での移動を前提とするため、その紹介範囲はおのずと限られることとなる。

一方、明治時代になると各地で鉄道が開業する。日本では開通した区間や年次の違いはあるものの、神社仏閣への参詣客、温泉地への湯治客を輸送することを当て込んで計画された鉄道が多いことも特徴である⁽¹⁰⁾。また、江戸時代から知られる既存の観光地に乗客を輸送することを目的とただだけでなく、近代以降は鉄道会社自らが乗客獲得のため、遊園地やスポーツ施設などを開設していたことはよく知られている⁽¹¹⁾。

このように、近代以降における東京近郊の日帰り観光地は、江戸時代以来の徒歩圏内の地点と、鉄道開通以降新たに日帰り圏に組み込まれた地点の両者が混在していたことになる。

飯能は現在、上流部の川遊び、山間部の山歩きやハイキングといった、アウトドアレジャーの盛んな地域であると同時に、中心市街地は古くからの在郷町の雰囲気を残す「街歩き」スポットとしても人気がある典型的な日帰り観光地である。もちろんこのような認識は昭和30年代以降に広まったものであるが、大正4年に池袋・飯能間が鉄道で結ばれて以降、埼玉県西郊に点在する観光スポットへの玄関口としても機能してきた歴史を有する。本稿では、書籍に登場する飯能に注目するため、実際の産業や商業活動の実態を検討するものではない。しかしながら、観光行動を希望する読者に、飯能はいかなる「キーワード」を提示し、イメージを想起させてきたのかを検討することは、時代の価値観や何を観光資源と考えるかといったことが変化するという事実と照らし合わせるならば、有用であるといえる。

本稿ではまず明治末期から昭和初期に出版された紀行文、旅行ガイドから、飯能での主要訪問地点を挙げ、それが第二次大戦後にいかに変化していくのか順を追って検討する。

II 飯能中心市街地の成立と交通路の特徴

(1) 江戸時代の飯能と産業

飯能とその周辺地域は、江戸時代初期には大都市江戸の発達とともに大量に必要とされた薪炭の供給地として発展してきた。元禄期頃までは、飯能の1kmほど北東にある中山集落⁽¹²⁾に代官所の陣屋が存在し、定期市が立っていたとされる。入間川・吾野川沿いの山間地域は、現在まで西川材と呼ばれる杉・松の産地として名高い。しかしながら江戸時代初期には自然林の伐採による薪炭の産出が大部分を占めており、それらの出荷用に山間地で入手しにくい荒縄などが谷口集落である中山の定期市で取引されたという。市や商業機能が飯能市街地に移った後も、定期市は通称「縄市」と呼ばれ賑わった。

江戸時代中期からは、自然林の伐採跡地が杉・松の植林地となり、成長した人工林は建築材として大きな需要を占めるに至った。それゆえ炭薪として陸路で中山まで運ばれていたものが、切り出した丸太を筏に組み入間川を流送させるように輸送体系が変化していった。この変化に合わせて、川幅の狭い山間部から平野部へと流れ出る地形の転換点である「飯能河原」周辺が材木流送の中心地となっていく⁽¹³⁾。元禄期を境に旧来より市の立った中山と飯能の中心性が逆転する要因も、このような材木輸送の変化が関連していることが想像される。その状況を表すのであろうか、商業機能が集積していく飯能の中心地は、近世においては「飯能村」、「久下分村」、「真能寺村」という3ヶ村の村境に立地している（図1）。このように村境に主要道を計画的に作り、道の両側それぞれの村分に新たに町立てしたのが、飯能の中心地と考えられている⁽¹⁴⁾。そしてこれら3ヶ村を総称して在郷町の「飯能」が成立していた。

(2) 交通路と地域間関係

飯能は前述したように江戸時代中期以降、定期市の立つ中心性の高い商業地となり、周辺地域との往来も盛んであった。引き続き図1より市街地の交通路を概観すると、広小路から東に向かうと扇町屋に至った。明治32年（1899）には、入間町までこの道を利用して馬車鉄道⁽¹⁵⁾が開通し、所沢、国分寺を経由して鉄道で東京都心とつながる主要な交通路となった。この他、広小路から南へは八王子に通じる往還も分岐する。一方、飯能から北へ向かう道は真能寺村と飯能村を分ける街路を北進して秩父道と分かれ、日光へと至る。これはいわゆる「日光脇往還」で、八王子千人同心が日光警備に赴く際に通行した。それゆえ飯能は小規模ながら「宿」の機能も有しており、馬5匹が常備され、問屋場も久下分村に所在していた。そして市街地西側は、入間川をはさんで道が南北に分かれ、北西は入間川に沿って上流の名栗村へ、南西側は川を渡り青梅宿へと通じていた。



図1 飯能における旧村の位置関係と交通路
(大正12年測図2万5千分の1地形図「飯能」より作成)

交通路に大きな変革があったのが、前述した入間町までの馬車鉄道の開通である。この発着所は現在の銀座通り入り口付近に設置されたため、市街地が東に広がる契機ともなった。そして大正4年(1915)には武蔵野鉄道が飯能まで開業したことにより、池袋までの所要時間が90分と格段に短縮された。飯能まで鉄道が直通した大きな目的の一つは、西川材の輸送であった。西武鉄道が川越から東村山経由で高田馬場までの直通を開始するのは昭和2年(1927)のことであり、後に同じ西武鉄道となる両路線を比較すると、飯能の方が都心直通を開始したのが早いことになる。そして昭和4年(1929)には飯能の北、吾野駅まで武蔵野鉄道が延伸する。その際、飯能駅の先に線路を延ばすことが地形の制約上困難であったため飯能駅でスイッチバックし、2年後の昭和6年(1931)に開通する国鉄八高線⁽¹⁶⁾と東飯能駅で接続をとりつつ急カーブして西に向かっていく。この東飯能駅の開設により、広小路から東に向けて飯能の市街地が拡大することとなった。

武蔵野鉄道は昭和21年(1946)に合併と改称により現在の西武鉄道⁽¹⁷⁾となり、さらに昭和44年(1969)には吾野以北の西武秩父駅まで延伸するが、この飯能・秩父間は、途中の東吾野や横瀬などから産出される石灰石輸送が重要視されていた。一方で、東京都心から飯能を経て秩父まで直通する鉄道の存在は旅客の移動にも大きな影響を与え、特に休日の日帰り行楽の適地として広く認知されていく事となる。次章において、入間馬車鉄道時代、武蔵野鉄道時代を中心に、飯能における行楽地の認識の変化について検討していく。

Ⅲ 明治・大正期における飯能と郊外に行楽地

(1) 大町桂月『東京遊行記』にみる明治末期の飯能

大町桂月は明治2年(1869)高知県生まれの歌人、詩人、随筆、評論家である。多彩な文筆活動の傍ら生涯旅を愛し、北海道の「層雲峡」の名付け親としても知られている⁽¹⁸⁾。

彼が明治39年(1906)に発行した紀行文の随筆『東京遊行記』⁽¹⁹⁾は、都会の雑踏を離れた風景の描写をちりばめつつ乗り換え駅や発着時間まで網羅し、旅という非日常性を豊かな筆致で描いた、管見の限り実用的な旅行ガイドの内容を持つ最初期の出版物である。この序文には、東京に暮らす人に向けて「近郊の勝景」紹介に力を入れていること、地方に暮らす人には「東京見物の大要はほぼ尽した」ものであることを記しており、あらゆる年代、居住地の読者層を想定している様子もうかがえる。

行楽地の紹介は、まず1. 梅園や梅の名所、2. 向島花屋敷周辺、3. 本所周辺、といった、旧江戸市中以来の花鳥風月の名所が順番に登場する。そして次項からが郊外の紹介となり、4. 南郊の梅(大井村、蒲田、矢口)、5. 江戸川国分台の眺望、6. 品川の潮干狩りと続くが、これらも江戸時代以来の浮世絵の題材となる風景や、徒歩時代の日帰り行楽地の認識に基づいた内容といえよう。一方で、25. 成田不動と宗吾の霊堂、26. 大宮公園、27. 多摩川の右岸(玉川上水)や、30. 館林のツツジと牛島の藤など、当時の交通事情からすると日帰り圏の最大地点も紹介されており、序文にある通り江戸市中だけでなく積極的に郊外の紹介も加えようとした構成となっている。また、26. 大宮公園の章では臼井、氷川神社、大宮公園、伊佐沼、川越城址という順路で紹介が続くが、現在の一大観光地である川越が伊佐沼の水辺と、川越城址、そして喜多院を記述するのみであることや、開業したばかりの川越電気鉄道に乗るため⁽²⁰⁾大宮と同行程に入っていることなども注目されよう。そして本書では最後に、東京市街・郊外の各寺院を「移し霊場」とした八十八ヶ所詣と、結論⁽²¹⁾が述べられた後、さらに「捕逸」として埼玉県飯能と千葉県我孫子が登場する。

大町がたどった飯能への順路を再現すると、田植えの終わった季節に大久保駅から汽車に乗り西に向かう⁽²²⁾が、まず境駅(現・武蔵境駅)で下車し、行程2里半で野火止の平林寺⁽²³⁾に到着する。寺を見学後、徒歩で柳瀬川を渡り所沢に達するが、その間も路傍の祠や老桜など気に止まったものを列挙していく。所沢からは川越鉄道で入間川駅(現・狭山市駅)に到り、馬車鉄道に乗り換えて2里、1時間をかけ飯能に到着する。

飯能における最初の訪問先は(図2)、駅から1里離れた高麗王の墓⁽²⁴⁾と「古き寺」(聖天院)である。現在はどちらもJR八高線高麗川駅、あるいは西武池袋線高麗駅が最寄り駅となるが、当時は飯能から徒歩で訪れる地という認識であったことになる。参詣後は飯能市街に戻り、尾崎

紅葉も泊まったという吉田屋旅館に宿泊する。そこで宿の主人より幕末の飯能戦争⁽²⁵⁾の様子を聞き、能仁寺（振武軍の本陣）、羅漢山（後の天覧山）を紹介され、翌朝宿の若主人をガイド役として実際に訪問する。その際、能仁寺には黒田家、中山勘解由の墓があること、寺から南に坂を下った名栗川には岩根橋が架かり、川の水が清く筏が多く浮かんでいることを描写している。そして飯能の鎮守、諏訪神社を回り、朝8時過ぎ、朝食のため宿に戻る。

宿では再び主人から「子ノ権現」⁽²⁶⁾に行くことを薦められ、朝食後に一人で出発する。ここからは子ノ権現まで4里の道のりを順次紹介し、登場順に再び岩根橋、名栗川に沿って1町先の森にある尾崎紅葉も写真を撮影したという珍しい檜の大木の様子を記述している。ほどなく名栗溪谷から倉越峠を越え中藤川の谷沿いに入り、子ノ権現まで「六十六町」の道標を確認すると、以降1町ずつの道標が目印となっていく。また、途中の柚小屋では水力で製材している様子や、小学校から下校する児童と道中一緒になったことが書き留められる。「七町目」に至ると竜ヶ谷滝が、さらに急坂の先に二本の巨杉、峰を行くと大日如来の石像があり、子ノ権現境内に至る。境内の描写としては、阿字峰、経ヶ峰、愛宕山など標高600mほどの入り組んだ尾根が作り出す深山幽谷の景色が、青梅の御岳山や高尾山にも勝っているとし、「山水を愛するもの必ず一遊すべき處也」と絶賛している。

このように大町が飯能で事前に決めていた目的地は高麗王の墓・聖天院のみであり、それ以降の行程は現地の宿の主人が薦める名所を言われるがままに訪問するという体裁をとっていることが特徴である。事前情報をあえて持たず、いわば「ぶっつけ本番」で訪れた地を豊かな筆致で描

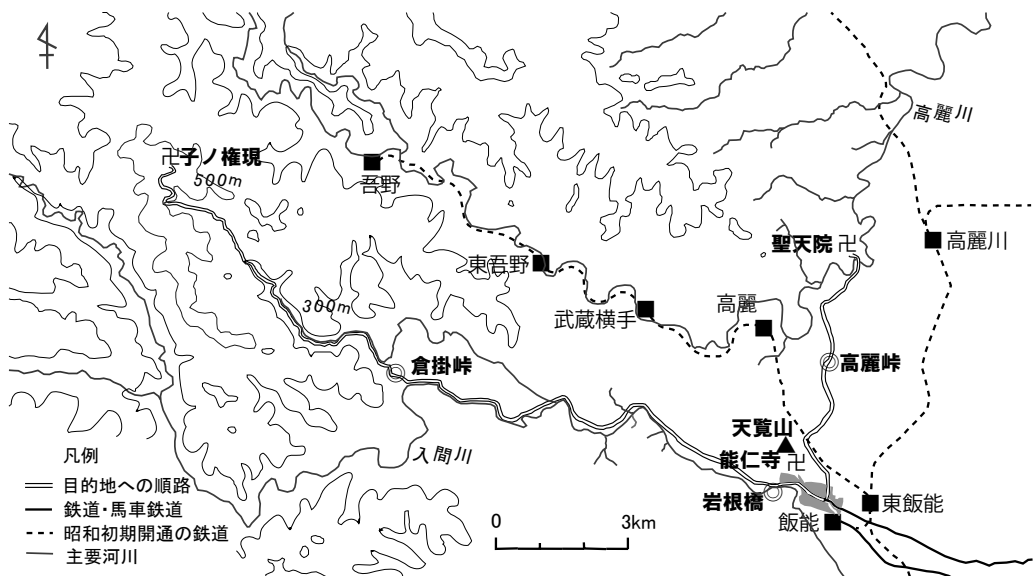


図2 明治～大正期における飯能を起点とした行楽地の位置関係
 (下図として国土地理院「地理院地図」を使用)

写することが、読者には旅の非日常性が伝わる醍醐味となっている。

ところで、子ノ権現までの経路も、現在では西武秩父線吾野駅もしくは西吾野駅で下車し西に向かって登山するルートが一般的となっている。前述の高麗王の墓と同様、これも鉄道が飯能までしか開業していないことによる最寄り駅の認識と捉えることができよう。

(2) 行楽適地の分類と飯能の位置づけ — 『郊外探勝その日帰り』 明治 44 年 (1911) —

落合昌太郎は明治 12 年 (1879) 東京の生まれで、若い頃は東京日日新聞の記者、後に演劇評論を得意とする出版社「玄文社」に入社し、その後は役者、演出家、脚本家として活躍した人物である。『郊外探勝その日帰り』⁽²⁷⁾ は、落合が新聞記者時代に発行した書物と考えられる。

本書では、東京市街とその近郊合わせて 50 か所の行楽地が登場する (表 1)。その順番は市川 (千葉)、成田山 (千葉)、杉田 (神奈川)、一ノ宮・大原 (千葉)、川崎 (神奈川) というように法則性は見いだせないものの、目的地ごとに「花」、「おまいり」、「海水浴」など行楽に適したテーマが設定されていることが特筆される。「花」と「梅」を別分類にしているなど、当時の価値観を含め検討する余地は残るが、文体を読ませるといふ紀行文の形式から、行楽目的に見合った「見出し」を付け当時の読者層を引き付ける、いわば「行楽地のカタログ化」がはじまっているものと推察される。

本書において飯能は巻末に近い 47 番目の項目、テーマは「遠足」として紹介される⁽²⁸⁾。本文は、都心から乗車した鉄道を国分寺で乗り換え入間川、さらに鉄道馬車で 1 時間という交通案内からはじまる。飯能での遊覧地は、登場順に能仁寺、羅漢山改め天覧山からの眺望、子ノ権現の 3 ヶ所である。このうち子ノ権現までの描写に注目すると、岩根橋、檜の古木、名栗溪谷から峠を越え中藤上郷集落、六十六町の道標、山中の龍ヶ谷滝、阿字の峰の大日如来像など、大町の記述を踏まえたものであることがわかる。大町との関連は、例えば飯能の 2 つ前の項目 45 に「東京八十八か所めぐり」が登場するなど、いくつかの類似性が指摘できる。おそらく本書出版の意図として、落合本人がすべて現地赶赴しているかは重要ではなく、むしろ遊覧地がいかなる目的に適した場所なのかをジャンル分けして読者に紹介することに主眼があったのであろう。その意図に沿って既存の情報を再編集した「ガイド本」が明治末期には受容され、しかも飯能のキーワードとして「遠足」が登場し、それが定着していく画期となったことは特筆に値しよう。

(3) 別荘候補地としての飯能 — 大正 5 年 (1916) 『郊外住宅と新別荘』による記述 —

明治初期より政府高官や日本在住の外国人、経済界の重鎮などは、軽井沢や日光、あるいは湘南地方に別荘を所有し、夏の長期休暇において独特の別荘文化を育てていたことはすでに知られている。一方で、日本国内の産業が発展すると、中小資本家などの間にも、保養地に滞在して余暇を過ごすことがある種の流行となる⁽²⁹⁾。そして、明治 30 年代には東京中心部の環境悪化が知

表1 『郊外探勝その日帰り』に掲載された遊覧地

掲載順	場所	主要目的	内容	所在都県	掲載順	場所	主要目的	内容	所在都県
1	市川	花	神社仏閣	千葉	26	向島	おまいり	七福神参り	東京
2	成田山	おまいり	神社仏閣	千葉	27	大山	おまいり	登山・参詣	神奈川
3	杉田	梅	横浜見物・金沢八景	神奈川	28	六阿弥陀	おまいり	六ヶ寺参り	東京
4	一ノ宮・大原	海水浴		千葉	29	熊谷	桜	荒川堤	埼玉
5	川崎	おまいり	神社仏閣	神奈川	30	茅ヶ崎	海水浴		神奈川
6	江の島・鎌倉	ゆさん	神社仏閣	神奈川	31	入谷	あさがお		東京
7	御岳	もみじ	鍾乳洞	東京	32	鬼子母神	おまいり	神社仏閣	東京
8	稲毛	海水浴		千葉	33	大久保	つつじ		東京
9	堀の内・新井	おまいり	神社仏閣	東京	34	葉山	海水浴		神奈川
10	蒲田・小向井	梅	神社仏閣	東京	35	春日部	藤		埼玉
11	館山	海水浴		千葉	36	館林	つつじ	神社仏閣	群馬
12	池上	おまいり	神社仏閣	東京	37	亀戸	藤	神社仏閣	東京
13	成東	湯治		千葉	38	目黒	おまいり	神社仏閣	東京
14	大宮	ほたる	公園	埼玉	39	海晏寺	もみじ	神社仏閣	東京
15	大磯	海水浴		神奈川	40	泉岳寺	おまいり	神社仏閣	東京
16	小金井	桜	玉川上水	東京	41	金沢	遊山		神奈川
17	箱根	湯治		神奈川	42	喜多院	おまいり	神社仏閣	埼玉
18	銚子	海水浴		千葉	43	東京八十八か所	おまいり	札所巡礼	東京
19	大雄山	おまいり	神社仏閣	神奈川	44	布施・柴又	おまいり	神社仏閣	千葉・東京
20	二子玉川	鮎漁		東京	45	飯能	遠足		埼玉
21	大洗	海水浴		茨城	46	荒幡	遠足	狭山丘陵	埼玉
22	水戸	梅	公園	茨城	47	小岩不動	おまいり	神社仏閣	東京
23	高尾山	紅葉	登山	東京	48	桐ヶ谷の滝	すずみ	神社仏閣	東京
24	新子安	海水浴		神奈川	49	堀切	菖蒲	公園	東京
25	飛鳥山	紅葉	公園	東京	50	等々力の滝	すずみ		東京

(落合昌太郎『郊外探勝その日帰り』有文堂書店、1911より作成)

られはじめ、国木田独歩が郊外に美を見出し「武蔵野」がブームとなっていく⁽³⁰⁾。

そういった状況において出版された本書⁽³¹⁾では、今後別荘地として有望と思われる地域が15か所紹介されており、いずれも都心からのアクセス、歴史、産業、名所、利用できるサービス業、土地価格などの情報が網羅されている。別荘候補地は、白河（福島県）を筆頭に、以下保谷村（現西東京市）、飯能、箱根仙石原、富士宮（静岡県）と続く。また、注目されるのはこの他に白子村（現千葉県）、沓掛（現長野県中軽井沢地区）、鴨川町（現千葉県）、沼津町（現静岡県）など、後に別荘地や海水浴場といった滞在型の観光地となった地域も登場している点である。このことについては、出版の経緯において触れられているが、まず国民新聞紙上において「理想的郊外生活地」、「理想的新別荘地」を読者から募集し、その投票数の多かったものを再編集して本書が作成された。すなわち、単に理想の候補地のみを列挙したのではなく、地域の実情を踏ま

え、需要が見込める地点を投票で選んだことが特徴である。それゆえ、大正初年頃の飯能は別荘地として「見込みのある上位」とみられていたことになる。本書が前述2つの刊行物と異なる点は、この時代には武蔵野鉄道が飯能まで開通し、池袋から直通で飯能に到達することが可能になっていることであろう。以下、利便性が高くなった時代の飯能に関する記述を引用してみたい。

上野より三十二哩七分、池袋より二十七哩二分の近距離にある飯能町は、東京附近唯一の日帰り遊覧地で池袋からは武蔵野鉄道に依り一時間半を要するのみである。飯能の人は云う『飯能の地盤は岩で成って居るので地震の被害は全くない。彼の白河町が岩の上にあるために地震の害がないと同様である。地震のない上に気流の具合が余程面白く、飯能を中心として二里四方には殆ど電害がないので春先に桑葉を傷められ養蚕に差し間違える様なことはない』と飯能が其地質に於いて、其気流に於て、別荘地或は生活地に適して居ることは此の話で大凡ぞ窺われる。(句読点は山下加筆)

ここでいう気流とは、「温暖で空気がきれい」という意味合いであり、工場の増加や人口過密で生活環境が悪化しつつある東京都心から離れた飯能は、保養地に適していると解説する。また、大正5年(1916)の段階で「飯能は未だ東京人の遊覧地として十分な設備はないが医師5人居り、寺院9、銀行3、料理店6、旅館5、芸妓屋6、理髪業(男女共)25、人力車43、湯屋3、漁船4ある。」と記載され、ある程度の滞在日数を予定する行楽客向けのサービス業の有無とその数を示している。

そして今後の展望として、天覧山と多峰主山を結ぶ歩道が整備されつつあること、名栗村までの道路状況が改善されつつあること、同村でラジウム鉱泉⁽³²⁾が発見され今後は療養客の流入も見込めることを挙げている。しかし、飯能の現況として「遊覧地としてみた飯能は甚だ努力はして居るが未だ完全の域に達したとは到底云ふことは出来ない。天然物許りは申分なく揃って居れど人工の程度が足りない。又客を迎える設備も不足して居る。従って遊覧客をして楽しく一日を暮らさせることは殆ど不能と云っても差支はない。」と、風景や散策地などソフトツーリズムの素材は揃っているが、地元の生活者以外が気軽に利用できるサービス業を中心とするハード部門がほとんどないという指摘もしている。このように、大正初期の段階では、滞在型の別荘地候補地として飯能を見た場合、ある種「不便を非日常として楽しめる」人向けの場所として紹介している感が強い。

本書の出版後、関東大震災が発生し、東京から郊外への都市発展構造は大きな変革をもたらされ、のどかな農村であった保谷村は別荘地とはならず、東京西郊の住宅地として発展することとなる。同様に飯能も当初の予想とは異なる発展をたどることになるが、まだ当時は有望ではある

がほぼ手付かずであった箱根仙石原や杳掛（中軽井沢）と同等の地として飯能が見られていたことは注目に値しよう。

(4) 学校教育としての遠足目的地——『遠足の栞』大正8年（1919）——

「遠足の栞」というと遠足に行く当事者が作成するものと思いがちであるが、本書⁽³³⁾は、学校教育がある程度普及した大正期において、都心を起点として児童・生徒が遠足で訪れるモデルコースを掲載した教員向けのガイド本である。掲載されたモデルコースは、すべて都心から鉄道を利用することが前提となっており、目次の順に「第一 東海道線方面」の項では谷垂・洗足池・本門寺の説明からはじまり、川崎・羽田、江の島や大磯までが範囲に含まれる。「第二 玉川電車方面」では松陰神社・豪徳寺・櫻楓園⁽³⁴⁾を紹介し、以下「第三 京王電車方面」と続く。その、第五として開業間もない武蔵野鉄道方面が登場し、行先として飯能の天覧山が挙げられている。その記載を本文から引用すると、

飯能駅から市街を通り其西北端に出づるや道を左に折れ細径を進めば天覧山に達す。徒歩約十三町あり。山中の勝を探ね又は雄大の展望を賞し、帰路は南下して名栗川畔に出でて後市街に入り停車場に向かうを順路とす。

となっている。この天覧山周辺の見どころとしては、眺望と奇岩、十六羅漢像、そして明治天皇が陸軍演習を観覧したことと、それを記念して天覧山と改称されたことが記されている。また、能仁寺についても、領主中山氏、戊辰戦争などの歴史的経緯に関連させた説明が続くが、児童向けの遠足地紹介であるため、飯能駅から無理なく行けるこれら2か所の範囲に限定している。その一方で、本書では目的地までの鉄道路線各駅について、駅が所在する町村の概況が数行の情報として紹介される。武蔵野鉄道の場合は、始発駅である池袋から停車順に、東長崎、練馬、石神井と、当地の人口や物産の概要が記述されている。このことは、車内においても生徒の野外学習ができるよう、地理のエクスカージョンを想定したガイドになっていることが興味深い。この頃に、どれほどの学校が飯能を遠足の目的地としていたかは不明であるが、大正期には天覧山が児童でも登れる山として東京の教育関係者にも認知されていたことは興味深い。

(5) 現地調査を行ったガイド本の記載——『最近実査東京から』大正10年（1921）——

『最近実査東京から』⁽³⁵⁾は大正10年に出版された、都心および郊外への日帰り行楽案内を目的としたガイド本である。これまでに検討した3つの書籍と異なり、その諸元に「従来此種の世に出たのは一、二には止まらないが、自分が行きもしない處を沢山入れたり、事実よりも文章に力を注いだり、行ってから（出版したのが）何年になるなどあったり、謬ばかり目について、これ

はと思うのは一冊もない」(カッコ内は山下加筆)とし、当時すでに刊行されていた行楽地ガイド本を批評する一面も見られる。大正期には紀行文と行楽の実用書との区別が未だにあいまいな状態であったことが書き出しから知られる。また筆者は、吉田博士の「大日本地名辞典」⁽³⁶⁾を調べた上で現地へ赴くとしているが、この本は携帯に不便で、実地調査を経ない箇所も多く誤記があるので、自分が読者の携帯に便利な手ごろな書物を作ることにしたと出版の動機を述べている。本書は掲載する行楽地をすべて訪問、確認したうえで読者に情報を提供するという、実用ガイド書という体裁を明確に打ち出した最初期の出版物であると位置づけることができる。掲載された遊覧地は全55か所に上り、筆者の永溪は出版前年の夏以降、すべての地点を訪問したとする。

本書の構成は「一～六」までが旧江戸市中以来の名所を取り上げ、七からが千葉県内、十八から埼玉県内の紹介が多くなる。埼玉県内は、二十七 野火止の平林寺、二十八 川越附近、二十九 練馬石神井方面、三十 東村山と山口、三十一 小手指原、三十二 飯能、三十三 入曾附近、と続く。掲載された訪問地のうち最も遠い地点は、西は下諏訪、南は伊豆大島となっている。

三十二 飯能は、「飯能は武蔵野からもう山辺へ入り込んだ所、汽車ができて7、8年、その終点」との記載からはじまる。筆者は訪問の適期として秋を挙げ、なだらかであるが途中の眺望が良い高麗峠を越えて聖天院に至るまでの散策を推奨する。その後、高麗王をまつる高麗明神、日和田山を巡り、天覧山に至る。ここではツツジ、桜、黒田直邦の墓が山中の勝地として紹介され、麓の能仁寺では戊辰の役との関係を説明する。また、入間川の鮎や水の清冽さを称える記述もある。このように本書では飯能から聖天院へ向かい、その後復路で天覧山を訪れるという周回ルートを提示している。そして「飯能で観る處といへば以上であるが」と前置きした上で、約4里の行程で子ノ権現に詣でるまでが東京からの日帰り圏としている。最後に「武蔵野鉄道、池袋より片道83銭、約2時間。省線と連絡切符もあり、学生の2割引券も通用する。子権現へ行くなれば、他へはまづ行けないが、二番汽車でも終列車で帰る気ならゆける。然し一番で立つに若くはない。」としている。

ところで、本書においても、宿泊を別とすれば大町が紹介した訪問地とほぼ同一行程ということになる。本書の意図は、既存の紀行文、旅行案内を参考に現況を報告することにある。そのため、永溪は自身で新たに遊覧先を開拓するのではなく、既に知られた行楽地の再確認を行うことを重視したのである。それゆえ大町が見出した明治末年の飯能周辺ガイドは、大正10年の段階で十分通用するという確認を行い、交通情報を追加して掲載したものと捉えられる。

飯能が東京都心からの日帰り圏となって以降出版された観光地案内書をいくつか確認する限り、天覧山や能仁寺など駅から2km圏内の地点と、当時の最寄り駅であった飯能から4～5km離れた聖天院周辺、そして子ノ権現を含めると16kmほどの、決して駅近隣ではない地点が名

所・名勝として紹介されることが多く、しかも明治・大正期を通じて飯能を玄関口とする行楽地に変化がないという特徴が明らかとなった。一方で飯能の市街地や当地での飲食に関する記載は、夏の鮎の名所として以外には登場せず、滞在型の行楽では利用できるサービス業が不足しており、市街地内での商業展開と行楽客の需要との間には接点が見いだせない状況が続いていたこともうかがえる。

IV 商業雑誌にみる飯能地域の日帰り余暇空間の変化

(1) レジャーの普及と飯能（1970年代）

池袋・飯能間で営業していた武蔵野鉄道は、昭和4年（1929）に吾野まで約14kmの区間が延伸し、南側から秩父に至る主要ルートである正丸峠の手前まで鉄道が開通することとなった。昭和44年（1969）には吾野駅から西武秩父駅までが開通し、それまで熊谷経由であった鉄道路線が池袋から直通できるようになった。一方、吾野から秩父への自動車道路は、国道299号線が正丸峠を越えて秩父に通じていたが、1982年に正丸トンネルが開通し道幅の狭い峠越えの難所が解消された。これら交通路が大きく改善される中で、飯能と周辺地域は商業雑誌において、いかに紹介されてきたのであろうか。本章では、主として「ハイキング」、「街歩き」、「田舎暮らし」などをテーマに記事編纂が行われている雑誌について、飯能をキーワードとして掲載された記事を通覧し、時代ごとの観光スポットの特徴を考察していく。

管見の限り第二次大戦後の雑誌において、飯能が旅の目的地として最初に登場するのは「文化生活」1953年9月号における、円照寺⁽³⁷⁾の「風変わりな絵馬」という記事からである。その後は「飯能」を行楽地のキーワードとして取り上げる雑誌はなく、1974年「週刊小説」12月13日号においてようやく「ウィークエンドドライブ奥武蔵」としてマイカーによる宮沢湖への日帰りレジャーが紹介されるにとどまる。この他に70年代では「旅行ホリデー」⁽³⁸⁾において「都心から90分にもひなびた温泉」と題し青梅の岩蔵温泉が取り上げられているが、ここで注目されるのは、飯能市街を出発点とし温泉に向かうルート設定としている点である。その立ち寄り先として「幻の飯能焼」⁽³⁹⁾、「能仁寺」、「駅前焼き団子売店」の3地点を挙げ、さらに「商家の名残り姿のポツポツ見られる町中を抜け」と、飯能市街地に関する描写が初めて全国誌において紹介される。また、飯能の産業として「西川材の集散地」に言及している。そしてこれ以降現在に至るまで、飯能とその周辺地域を取り上げる雑誌記事では、「地元で愛されるグルメ」や「地域の産業基盤を背景とした暮らしや景観」を、訪問時の季節性と組み合わせて紹介することが確立していく。しかし一方で、すでにハイキングやドライブなどのレジャーが一般化していた当時においても、1953年から約20年間、「飯能」が行楽地のキーワードとして登場せず、飯能市街地の登場回数も極めて少ないということも指摘できる。これは、聖天院や子ノ権現をはじめとする飯

能以北の登山道・ハイキングコースが西武秩父線各駅から整備され、すでに飯能駅を最寄り駅とする必要がなくなっていることが影響している。

(2) バブル景気前後の飯能地域描写（1980年代後半～1990年代後半）

前項の特徴は1980年代においても顕著で、一般誌における飯能の掲載は1回確認されるにすぎない⁽⁴⁰⁾。しかもこれはレジャーガイドではなく、好景気による都心の地価上昇と関連した、「長距離でも座って通勤4LDK3,000万円台」という物件特集であった。1980年代後半は、「西武池袋線始発駅ゆえに所要時間が長くても座って通勤可能」という環境から、それまで所沢・入間周辺までが中心となっていた東京のベットタウン化が飯能周辺にまで及んできた時期に相当する。一方で1990年代後半になると、大規模住宅地開発に付加価値をつけたハーブ園、「ハーバルライフカレッジ」⁽⁴¹⁾が登場し、「癒し」といった新たな流行や価値観の文脈の中で飯能が紹介されることとなった。また、この年には「アミューズ」4月24日号において、「詩人藤原伸二郎を顧問にした郷土芸誌「飯能文化」」が特集され、天覧山、能仁寺、観音寺といった従来の名所を交えながら、かつては飯能河原交差点から広小路までが中心市街地であったこと、名栗村から始まった慶応2年の武州一揆の舞台でもあること、飯能市郷土館で山里の暮らしへの理解を深められることなど、史跡や風光明媚な地としての紹介だけではない、文学や歴史愛好家の目を引く事績が記事として登場している。

このように、山歩き・ハイキングの玄関口が西武秩父線各駅に移り、飯能から切り離された一方で、別の関心を持った読者層を想定し、市街地に点在する新たな観光価値を見出していく内容に変化しはじめることが読み取れる。

(3) 材木供給と中山間地の魅力（1990年代後半～2000年代前半）

1997年には「週刊読売」において2回（3月2日、16日）、「暮しの手帖」（6月号）において1回、飯能に所在する建築材にこだわった個人住宅に注目している。また同年の「自由時間」5月号では「快感！ 飯能市移住遠足気分通勤」を特集するなど、飯能における住宅情報の紹介が増加する。

ところで、1997年にはその前年に創刊した「散歩の達人」が通巻18冊目にして初めて飯能を取り上げている⁽⁴²⁾。この雑誌は、都心とその近郊において、路地歩き、生活感、B級グルメといった、これまでの観光になかった地元住民の目線を取り入れた「街歩き」をテーマとし、読者を獲得してきた雑誌である。ただし、この号では「日帰りで行く近場の避暑地」として、長瀬、埼玉県立自然史博物館と並んで名栗溪谷の清流とカートレース場「フォーミュランドRA」が紹介されるにとどまる。しかし、これにより「地元の穴場」的存在であった名栗溪谷周辺が、夏の涼を求める適地として全国誌に見いだされたことになる。「散歩の達人」は、1年後の1998年2

月号においても「飯能焼を訪ねて」を特集し、これ以降飯能の掲載頻度が高くなっていく。例えば同年10月号では「西武池袋線沿線～秩父特集」として、飯能からは「あけぼの子ども森公園」⁽⁴³⁾ や、「マルブン」⁽⁴⁴⁾、「羊肉のタカトラ」⁽⁴⁵⁾ という特徴の全く異なる3か所に焦点を当てる。いずれも商業誌初登場のスポットであり、この雑誌ならではの着眼点と言える。

一方、街歩きでは単発的に「アサヒ芸能」2001年6月14日号にマルブンのホーロー看板が、「東京ウォーカー」2002年3月5日号では体験型レジャーとして「フォーミュランド飯能RA」が取り上げられる。このように2000年代に入ると全国誌に繰り返し登場する場所が増えはじめ、飯能の新たな名所として認知され、浸透していくさまが推察される。そして「田舎暮らしの本」2002年4月は「奥武蔵・秩父、都会至近のエアスポット」と題して、名栗地区での溪流釣り、湖畔の名栗カヌー工房⁽⁴⁶⁾、西川材を扱う建築業者、そして複数の具体的な不動産物件が掲載される。大正期に「別荘候補地」とされた飯能は、時代を経てベットタウンとして住宅開発が進み一旦は観光地としての特徴が限定された。しかしその中で営業するいくつかの店舗が街歩き雑誌とその読者層を引き付け始め、他方で中心市街地から離れた名栗地区が、豊かな自然と木材産業の観点から、転居希望者と行楽客の両方に魅力を提示する場となっている状況であると解釈できる。

(4) 街歩きと山間部の魅力の融合（2000年代後半以降）

「散歩の達人」は2006年8月号に続き、翌9月号において、これまでになかった飯能周辺の大きな特集を組む。その掲載内容を順番に示すと（表2）、まず到着した飯能駅のスイッチバック構造と、かつて使用された引き込み線が駅の外にも残っていることを解説する。市街地（図3）では散在する古い日本家屋や看板建築が「町屋ウォッチング」の対象となり、「保存地区のような統一感のない景観」の魅力を説く。一方で記事では町の成り立ちにも言及し、飯能周辺を知行した中山信吉とその木像がある智観寺も紹介される。また、「材木の集積地、繊維工場跡、花街の面影」など、町が有した歴史を読者に想起しやすいキーワードとともに提示する。さらに、市街地だけでなく、下名栗、上名栗、吾野一带の見どころも網羅され、副読本リスト⁽⁴⁷⁾も付属するなど、これまでの雑誌記事にはなかった充実した特集となっている。この特集号を契機として、街歩き雑誌のジャンルでは飯能市街に点在する商店や飲食店の紹介記事が増える。例えば「日経マガジン」2008年9月号、特集「古のバブルと木の香り」には、かつて材木や繊維の取引で賑わった飯能界隈の名残を訪ねるといった趣向が見てとれ、現在では珍しくなった「杉山フルイ店」⁽⁴⁸⁾の他、かつての絹取引の盛況を伝える店蔵の「絹甚」⁽⁴⁹⁾、「小松屋うどん」、「古久や」といった飲食店が武蔵野うどんの食文化の文脈で登場する。そして「新島田屋」の味噌つけまんじゅうは、入間川上流から西川材を流送してきた筏師達の腹の足しにしたという逸話と関連させている。一方で、市街地の紹介と対となるように名栗溪谷の自然も紹介され、名栗カヌー工房で

表2 「散歩の達人」2006年9月号に登場する飯能市街歩きスポット

	紹介地点	概要
1	飯能駅	スイッチバック構造
2	飯能市中央公園	「鉄腕アトム」の銅像
3	智観寺	中山信吉 木像
4	あけぼの子ども森公園	通称「ムーミン屋敷」
5	天覧山	－
6	能仁寺	－
7	五十嵐酒造	「天覧山」蔵元
8	新島田屋	味噌つけまんじゅう
9	畑トンネル	1910年竣工のレンガ張り
10	銀河堂	裏絹問屋の店蔵
11	飯能市郷土館	－
12	マルブン	ホーロー看板
13	杉山フルイ店	江戸時代の木造家屋
14	新川長旅館	看板建築
15	4軒長屋	連続した看板建築
16	吉川ネーム店	古い看板
17	飯能織物協同組合	－
18	旧東都新聞社	－
19	旧大河原薬局	店蔵
20	中央公民館	旧市役所庁舎

(「散歩の達人」2006年9月号より作成)

1) それぞれの所在地は、番号順に図3と対応する。

の川下り体験と、西山荘笑美亭のエコツアーガイドが取り上げられている。この、飲食店を含む市街地景観と郊外のアウトドア体験の組み合わせを飯能の魅力とする傾向は続き、特に宮沢湖畔に温泉施設「宮沢湖温泉 喜楽里別邸」の完成以降は、これら紹介との関連が多くなる。かつて1970年代に、宮沢湖畔はアスレチックやアーチェリー、サイクリングといった野外スポーツ型のレジャースポットとして取り上げられていたが、近年では癒しと結びついた場へと変化している。また、「あけぼの子ども森公園」も家族向けスポットとして頻繁に登場していることも指摘できる。

そして2011年には「Hanako」が「草と種と日だまりと飯能の森」と題して飯能周辺を特集する⁽⁵⁰⁾。これには飯能市街地は含まれず、クリスマスローズ園、ハーバルライフカレッジ、あけぼの子ども森公園の3カ所と、日高市内の飲食店3軒⁽⁵¹⁾が紹介される。同年には「田舎暮ら

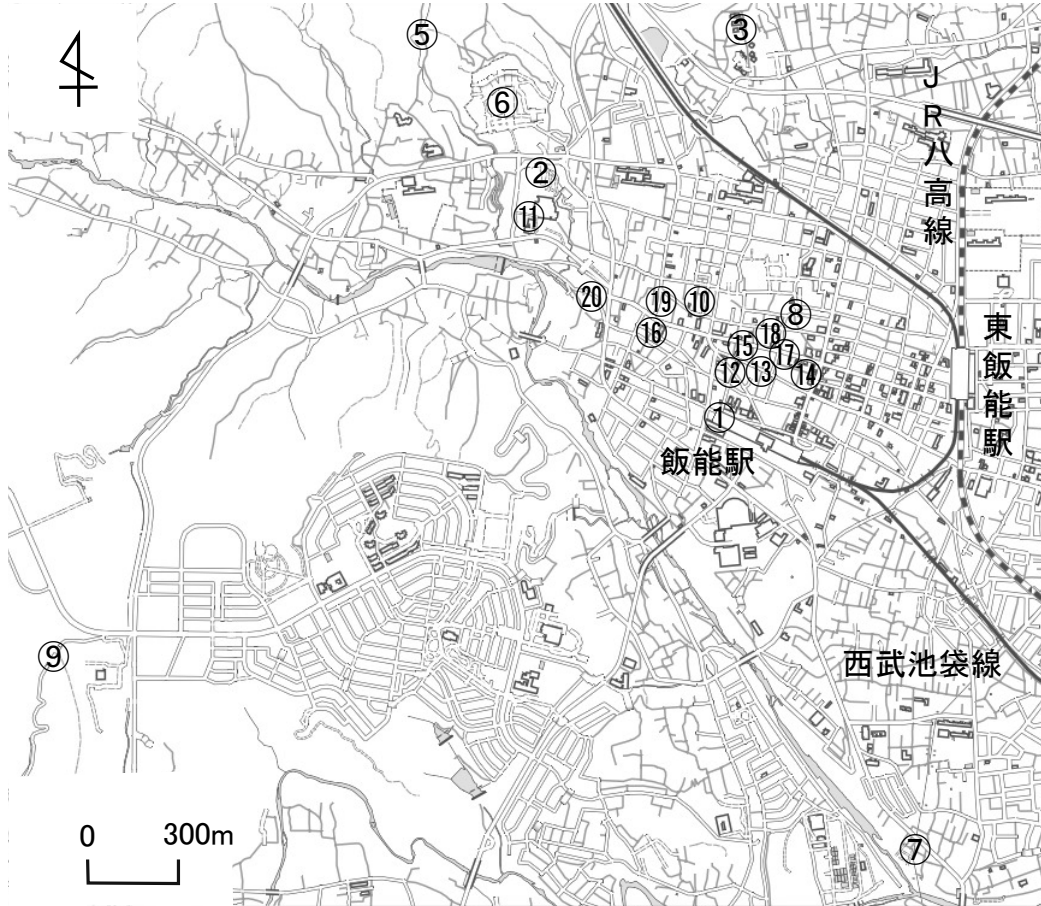


図3 「散歩の達人」に登場する飯能市街歩きスポット (2006年)

(「散歩の達人」2006年9月号より作成, 下図として地理院地図 Vector を使用)

- 1) 数字は表2に対応する。
- 2) 表2のうち、「4あけほの子どもの森公園」は本図の範囲外となるため図示していない。

しの本」9月号においてエコツーリズムと定住希望者向けの物件紹介を関連させている。その後も2012年、13年には名栗溪谷を中心にさらに支流に入った中山間地域も加わり、地域おこしとエコツーリズムも注目されていく⁽⁵²⁾。

このように近年の雑誌記事の特徴として、市街地に点在する飲食店や菓子店だけでなく、個性的なカフェや西川材の利用を基盤とする各種工房の紹介も増加する傾向が認められる。また、同じく西川材を使用した戸建て住宅の物件紹介といった、行楽とは目的の異なる文脈との結節も多い。一方、季節性に注目すると、夏は飯能河原や名栗溪谷が川遊びやバーベキューの適地となり、さらにより本格的なアウトドアレジャー体験の場としてカヌー工房などが取り上げられている。一方で「あけほの子どもの森公園」、「宮沢湖温泉」、「生活の木ハーバルライフカレッジ」な

ど、新たな施設の開業に合わせて、一年を通した訪問地点が紹介される傾向にあることが特徴と言える。

V むすびにかえて

本報告は、埼玉県飯能市とその周辺を事例として、東京都心からの日帰りの行楽需要と目的地の変化について、明治時代末期以降に出版されたガイドブックの記載内容から明らかにしてきた。

飯能が都心からの日帰り行楽地として注目されるのは、武蔵野鉄道が入間まで開通し、飯能まで馬車鉄道で接続された明治32年（1899）以降である。そして当初に行楽地として取り上げられた場所には以下の2点の特徴があった。1つは駅から至近の小学生の遠足としても訪問できる天覧山とその周辺であり、もう1点は飯能駅から約5km離れた高麗神社・聖天宮や、15km以上離れた子ノ権現など、駅を基点に遠方を目指すものであった。そして最初に行楽の適地を見出した大町桂月の紀行文が後にも大きな影響を持ち、以降に出版された案内本においても、飯能における見どころに大きな変化はみられなかった。その一方で、市街地や駅至近の地点を見どころとするものはなく、また当時の飯能周辺の産業に関しても、筏流しの風景が非日常の文脈で登場する程度であった。

第二次大戦後のレジャーブームにおいては、山歩き・ハイキングの適地として西武池袋線・秩父線各駅を出発地とする登山道が整備されたため、飯能駅がそれらの玄関口としては機能しておらず、1970年代まで宮沢湖が紹介されるにとどまることとなる。その一方で1980年代からは地域の地場産業である西川材を用いた戸建て住宅の紹介など、都心に通勤する需要を見込んだベッドタウンとしての側面に焦点を当てた不動産紹介記事が多くなる傾向にあった。ところで、かつての西川材は、入間川・荒川を経て大消費地である江戸・東京に流送されることを前提としており、西川材という名称も需要のある江戸において「武州西方から産出される材木」という意味でつけられた呼び方である。しかしながら定住者向けの物件紹介では、西川材が地産地消を示すキーワードとなり、そのことを前面に打ち出す構成に変化していることも興味深い。そして行楽目的が多様化するに従い、住都公団が手掛けたハーブガーデンや、かつて生活雑器を焼いていた「飯能焼」の窯元など、飯能の紹介記事も多様な展開を見せるようになる。その中で飯能市街地は、歴史的建築物の集中地区ではない、点在するがゆえの魅力という、街歩きの適地として新たに見いだされることとなった。そして郊外も夏の川遊び、秋の紅葉の名所として、入間川に沿った飯能河原以北の名栗地区が注目されていく。

埼玉県西部の丘陵、山間部は、昭和26年（1951）に「県立奥武蔵自然公園」に設定され、多くの登山道やハイキングコースが整備されていくこととなる。前述した子ノ権現も、現在は登山

道が複数整備され、一部は「関東ふれあいの道」として尾根伝いに天目指峠、伊豆ヶ岳、正丸峠などを経る縦走路ともなっている。そして県立奥武蔵自然公園一帯を目指すには、飯能から秩父に至る西武池袋線・秩父線各駅と、国道299号線から入間川、高麗川の支流沿いに分け入る林道、あるいはその東側を走るJR八高線の高麗川駅、越生駅が出発地点として機能することになる。このことについて例えば日高市に所在する「巾着田曼珠沙華公園」は、明治・大正期のガイド本には必ず登場していた高麗神社や聖天院から約2km南西に位置しており、今日ではその両方を巡回する散策ルートも人気となっているが、現在は両地点の最寄り駅はJR八高線の高麗川駅や西武池袋線の高麗駅と認識されている。

飯能が有していた山歩きの玄関口としての機能が失われていく時期は、それ以北の吾野、秩父方面への鉄道の延伸や八高線の開通と関連していることは本稿でも触れたが、まさにその時期に「奥武蔵」という、ハイキングや山歩きなど、レジャーを目的とする場合にのみ認識される地域名称が定着していった時期とも重なっている。

今回考察できなかつた地域名称「奥武蔵」の誕生と、登山・ハイキング需要の関係については、今後の課題としたい。

注および参考文献

- (1) 菊地俊夫「観光とは何か——その歴史とまなごしを探る——」, 菊地俊夫編著『観光を学ぶ——楽しむことから始まる観光学——』二宮書店, 2008年, pp.2-10。
- (2) ①山下琢巳・高橋珠州彦・田嶋豊穂・小口千明・古川克「埼玉県川越市街における景観変化と観光化」城西大学経済経営紀要35, 2017, pp.1-33。②高橋珠州彦・山下琢巳・小口千明・古川克「川越観光化にみる蔵造りへのまなごしとその変化」城西人文研究33, 2018, pp.1-48。
- (3) ①土金富之助『小江戸川越——江戸文化の残照を求めて——』創芸社, 1979, p.8。②前掲2) pp.24-30。
- (4) 現在のJR中央線飯田町・八王子間で鉄道事業を行っていた甲武鉄道の子会社。1892年に鉄道敷設免許状が下付され, 1894年より鉄道事業を開始。以降, 1920年に武蔵水電に合併し, 翌1921年から西武鉄道(初代)に社名が変更された。
- (5) 現在の川越市・霞ヶ関駅間に, 開業後2年間のみ存在した。
- (6) 入間川駅は前掲(4)の途中駅として開業し, 1979年駅名を現在の狭山市に改称した。
- (7) 老川慶喜『鉄道と観光の近現代史』河出書房新社, 2017, pp.153-190。
- (8) 山本光正『江戸見物と東京観光』2005, 臨川選書。
- (9) 金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色——『江戸名所図会』からみた行動文化』歴史地理学37-4, 1995, pp.1-21。
- (10) 平山昇『鉄道が変えた社寺参詣』交通新聞社新書, 2012, では, 鉄道開通による成田山や川崎大師への初詣需要の増加を指摘している。
- (11) ①宇田正『鉄道日本文化史考』思文閣, 2007。②宇田正・浅香勝輔・武知京三編著『民鉄経営の歴史と文化——西日本編——』古今書院1995。
- (12) 中山には後北条氏の有力家臣であった中山家範の居所・館があった。
- (13) 飯能市史編集委員会『飯能市史通史編』1985, p.315によると, 入間川では飯能河原より上流を「山川(やまっかわ)」と称し, 筏は1人乗りで横幅6尺, 長さ9間に仕立てた。そして飯能河原から

荒川合流点までは「下川（しもかわ）」と称し、同じ1人乗りでも長さ18間となり、山川筏の2倍から4倍を流送した。

- (14) 尾崎泰弘「飯能縄市の成り立ちと見世空間」飯能市郷土館研究紀要4, 2008, pp.54-68。
- (15) 入間馬車鉄道として明治32年(1899)に開業。馬22頭を有し1日18往復した。
- (16) この時は八王子・東飯能間の部分開業で「八高南線」と呼ばれた。八王子・高崎間の全線開業は昭和9年(1934)10月。
- (17) 武蔵野鉄道・初代西武鉄道, そして昭和19年(1944)に設立された食糧増産株式会社が昭和20年(1945)に合併, まず西武農業鉄道となり翌年西武鉄道に改称された。
- (18) 北海道アイヌ政策推進局アイヌ政策課作成「アイヌ語地名リスト」
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/4/2/6/0/9/6/_/7180P.pdf (最終確認2021年11月15日)では、「大正10年この地に来た大町桂月がつけた名だという。双雲別温泉などの名をもとに美しい字を当てたのであろう。層雲峡渓谷の入り口の双雲別川(ソウンベツ 滝・ある・川)の音から発想したとも思われる」としている。
- (19) 大町桂月『東京遊行記』大倉書店, 1906。
- (20) 前掲(19) p.331に、「四五日前より川越まで電車通じければ乗りてゆく」との記述がある。
- (21) 前掲(19) 目次 p.13。「徒歩の必要, 真の遠足家, 遠足に付随する趣味, 東京見物の大要, 遊行の諸勝地, 東京市百年の計画, 宗教と迷信, 臥遊の材料」の8項からなる。
- (22) この当時鉄道で飯能に向かうには甲武鉄道で国分寺に向かい, 川越鉄道に乗り換えて入間川駅で下車することとなる。
- (23) 現・新座市に所在する臨濟宗妙心寺派の寺院で, 山号は金鳳山。『江戸名所図会』にも野火止用水とともに境内が描かれている。
- (24) 8世紀ころ高句麗からの渡来人を武蔵野国高麗郡に移した際, 当地を統率した若光の墓とされる。
- (25) 慶応4年(1868)5月23日に飯能周辺において振武軍を中心とした旧幕府軍と新政府軍との間で行われた戦い。
- (26) 正式名所は大鱗山天龍寺で, 寺を開山した子ノ聖を大権現社に祀る神仏習合の寺。足腰を守護する仏として崇敬を集める。
- (27) 落合昌太郎『郊外探勝その日帰り』有文堂書店, 1911。
- (28) 遠足の適地は, 飯能と次項の48荒幡(狭山丘陵一帯)の2か所しかない。
- (29) 十代田朗 安島博幸 武井裕之「戦前の武蔵野における別荘の立地とその成立背景に関する研究」造園雑誌55-5, 日本造園学会1992, pp.373-378。
- (30) 国木田独歩『武蔵野』民友社, 1901(初版)。
- (31) 中柄正一『郊外住宅と新別荘』至誠堂, 1916。
- (32) 現在の名栗温泉大松閣。大正3年(1914)創業。
- (33) 東京女子師範学校附属高等学校編『遠足の栞』1919。
- (34) 現在の上野毛自然公園一帯。もとは江戸時代の名主田中家の敷地で, 個人が庭園を整備し, 一般開放していた。
- (35) 永溪早陽『最近実査東京から』東海堂書店, 1921。
- (36) 吉田東伍『大日本地名辞書』富山房発行は明治33年(1900)に第1冊上が出版され, 以降13年間かけて編纂された日本の総合地誌書。関東地方は, 「第六卷 坂東」に収録されている。
- (37) 西武池袋線元加治駅前に所在する。本堂に数百点の絵馬が奉納されており, 弁財天の大祭日に一般公開される。
- (38) 「旅行ホリデー」1976年4月号, 学習研究社発行。
- (39) 飯能第一国民学校編『飯能郷土史』1944, p.189によると, 飯能焼は天保年間以降, 真能寺村の窯で生産され, 一時期は江戸や東山道方面に販路があった。明治15年(1882)までは作られていたとする。

- (40) 「アサヒ芸能」1988年11月24日号。
- (41) 住宅・都市整備公団が造成したニュータウン内に設けられたコミュニティーゾーン、「飯能美杉台フォーラム内」で1996年に開園。このハーブ園は株式会社生活の木が運営している。
- (42) 「散歩の達人」1997年9月号、株式会社交通新聞社。
- (43) 1997年7月1日開園した都市公園。北欧の特にムーミンの世界観を再現しているとされ、2017年6月1日正式に許可を受け、原作者の名を冠した「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」が正式名所となった。
- (44) 飯能市仲町に所在。外壁のホーロー看板コレクションが有名。
- (45) かつて飯能で営業していた羊肉専門の卸売・小売店。戦前には軍用羊を扱っていたこと、戦後すぐの風景として、タカトラの所在する西武池袋線の線路付近は人家がなく一面の草地でかつては羊も飼育していたことが語られている。
- (46) 2005年1月1日に飯能市に編入合併されるまで、名栗地区は入間郡名栗村であった。村営カーヌ工房は現在NPO法人が運営を引き継いでいる。
- (47) ①飯能市教育委員会編「飯能の民家」、2001、②鎌田聡「廃校浪漫紀行」、文芸社、2001、③三島由紀夫「美しき星」、初版1962、新潮社と、自費出版本の④浅見徳男「埼玉ふるさと散歩（飯能市・名栗村）さきたま双書」さきたま出版会、⑤須藤恒雄「ハイカー秩父散歩」須藤恒雄 さきたま出版会、が挙げられている。
- (48) 現在営業はしていないが、江戸時代後期に建てられた木造の建物が現存している。
- (49) 明治30年代後半に建てられた土蔵造りの店舗で飯能市指定有形文化財。一般公開も行っている。
- (50) 「Hanako」2011年3月号、マガジンハウス。
- (51) 阿里山カフェ、たねの森、むささび亭の3軒で、いずれも高麗駅が最寄り駅。
- (52) 「地上」2012年8月号、家の光協会、ではかつて徒歩で集落を結んでいた旧道を復活させた「上植竹上分」を回るツアーと、地域の物産や工芸品をツアー開催日に家の軒先で販売する「黒指・細田」お散歩マーケットツアーを紹介する。飯能市はエコツーリズム宣言を採択し、市内の中山間地域の活性化を行っている。